



甘くてフレッシュ。 出荷最盛期を迎えた 岡崎のイチゴ

寒さもいよいよ本番。市内ではイチゴが出荷最盛期を迎えています。真っ赤で愛らしい形と甘くてジューシーな味わいに加え、ビタミンCが豊富で栄養面でも優秀なイチゴ。本来は晩春から初夏が旬ですが、ハウス栽培が盛んになった現在は、夏の暑い時期を除いて年中食べられるようになりました。

愛知県は、年間収穫量1万1千トで全国7位のイチゴ産地。その中で岡崎市は収穫量が4833ト（およそ161万パックに相当）あり、県内7位です。現在、市内のイチゴ農家は49戸。矢作地区を中心に、大粒で甘みが強い「とちおとめ」や甘みと酸味のバランスが良い新品種「紅ほっぺ」が栽培されています。

市内でイチゴ栽培が始まったのは戦前

のこと。市場出荷を目的に普及したのは昭和25年からと言われています。昭和30年代には、本格的なハウス栽培が行われるようになりました。



その後、暖房機の導入や花粉交配用ミツバチの利用、電照による促成栽培など様々な栽培技術の改良が行われてきました。

最近では、人の胸ぐらいの高さの棚に設置したプランターに苗を植えて栽培する「高設栽培」を行う農家も増えていきます。収穫時に腰をかかめずにすることから、長時間作業できるようになりました。また、日陰になる部分が少ないので、色むらのない輝きのある実が育ちます。もちろん土に根を張る「土耕栽培」も健在。大地の栄養をしっかりと吸収し、伸び伸び育った味の濃いイチゴも味わえます。

1月14日(土)には、ふれあいドーム岡崎で「いちごフェア」を開催します（詳しくは10ページに掲載）。ビタミンCが不足しがちな寒い冬のデザートに、新鮮な岡崎のイチゴを取り入れてみてはいかがでしょうか。

農務課 023◆6199

よくわかま病気の話

早期胃がんの内視鏡治療

胃がんは日本人に発症することの多い悪性腫瘍の一つです。最近ではわずかに減っていますが、死亡数は肺がんに次いで第2位と、まだまだ多いのが現状です。

きな病変でも一括で切除できるようになったため、胃がんがしっかりと取れているかどうか分かりやすくなりました。

早期胃がんとは、がんが胃粘膜の表層にとどまっているものを言います。進行した胃がんは症状がありませんが、早期の場合はほとんど自覚症状がありません。しかし最近では、検診の発達や内視鏡検査の進歩のおかげで、早期で見つかるがんが多くなってきました。

がんが胃壁の表層である粘膜層にとどまっているときは、リンパ節転移がほとんどないと言われています。そのため、胃の表層を切除するだけで根治効果が得られることが分かっています。最近では、早期胃がんに対して内視鏡的粘膜下層剥離術が行われ、完全に胃がんが治った患者さんが増えています。

早期胃がん治療では、外科的手術でなく、胃カメラを使って内視鏡的に切除できる場合があります。胃カメラを口から挿入して胃の粘膜のみを切り取る治療のため、おなかを切る必要がなく、体の負担が少なくて済む治療として注目されています。胃がんの内視鏡治療には、内視鏡的粘膜切除術（EMR）が普及していましたが、平成18年から保険適用となった内視鏡的粘膜下層剥離術（ESD）は大

胃がんは早期に見つかれば怖い病気ではありません。早期発見のために、定期的に検診を受けましょう。

岡崎市民病院 消化器内科

部長 坂野 閣紀

市民病院を受診する際は「かかりつけ医」の紹介状をお持ちください。